

『輪廻』

尻尾を振る猫の尻尾を掴まえて、そのまま腕をぐるぐるぐるぐる。

ちぎれた体が彼方へと消えて、尻尾の付け根からツツジが咲いた。

真っ赤な花を丁寧にとって、下からそっと口をつけたら、優しく甘い蜜の味。

脳から背筋へ電気が走り、気付けば手には細くて長い緑の鎖。

鉄の代わりに編まれた茨が肌へと牙を立てて、白地に赤い花が咲く。

猫の顔した花卉がひらひら、緑の尻尾もひらひらひらひら。

掴まえようと腕を伸ばしたら、枯れた花から毛むくじやら。

指はいつしか爪に変わって、お尻に絡まる緑が尻尾へ。

誰かの力が尻尾を掴んで、途端に視界がぐるぐるぐるぐる。

不意に解かれて落ちた先には、顔の見えない手と手と手と…手。

慌てて空へと手を伸ばしても、風は掴めず翼も持たず。

我を我をと求める果てに、自由な尻尾がゆらゆらゆらゆら。

喜びのあまりにはしゃいで掴み、我に返れば尻尾をぐるぐる。

そうして世界はぐるぐるぐるぐる、いつでもいつまでもぐるぐるぐるぐる。